

Title	日々のいとなみのなかにある対話
Author(s)	ほんま, なほ
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 111-124
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/94568">https://doi.org/10.18910/94568</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【臨床哲学の書きもの】

## 日々のいとなみのなかにある対話

ほんま なほ

## 消費される「対話」

医療、福祉、教育、そして政治や情報技術にいたるまで、日本社会では「対話」「対話型」ということばがあふれ、さらにその「対話」をあらたにビジネスとして利用しようとする動きもめずらしくありません。まるで「対話」とは、なんでもかなえてくれるマジックであるかのようです。

わたしが、大阪大学の臨床哲学のなかまたちとともに、対話の実践に取り組みはじめたのは、1998年からです。大学院時代、本を読むことしかしなかったわたしは、国内外の対話の実践者たちと出会い、対話のワークショップに参加して、実践をまなびながら、すこしずつですが、学校や病院に足を運び、いろいろなひとたちとの対話の活動をはじめていきました。そのころは、哲学研究や教育、医療の現場で、対話することのたいせつさをお話ししても、「いったいそれはなにの役に立つのか？」と首を傾げられるばかりで、ほとんど門前払いのようなあつかいをうけることが、すくなくありませんでした。それから、20年あまりたつて、いまの「対話」ブームです。「哲学対話」がいたるところで口にされ、あれほど対話や「哲学カフェ」を蔑んでいた哲学研究者たちも、さもじぶんたちの専門特許であるかのように、哲学の社会貢献やアウトリーチとして、哲学カフェをおこなっています。

こうした事態は、一方で、哲学や対話がポピュラーとなるという点で、よいことかもしれません。しかし、他方で、そのような流行や普及にもかかわらず、日本社会は、その根底においては、対話を拒む社会ではないのか、という思いを日々つよく感じさせられます。

## 対話を拒む社会

対話を拒む社会とは、どのようなものでしょうか？

ここで、わたしが15年ほどまえに、ある小学校の子どもたちと対話したときの経験をお話ししましょう。わたしたちは、道徳の時間のなかで、『ともだちや』という、よくしられた絵本について話しあっていました。子どもたちは、ものすごい勢いで、「ともだちだったら…」とそれぞれのかんがえについて、発言していきます。わたしも、いっしょに授業を担当していた先生も、つぎつぎにくりだされる、子どもたちのかんがえに、圧倒されてしまいました。ところが、授業を参観していた教員のひとりが、授業がおわったあとに、こう言っ

たのです。「こどもたちは、ただおしゃべりをしていただけで、なんにもかんがえていなかった」と。

おそらく、そう言った先生にとっては、「ともだちはこうあるべき」というすでにきまった答えがあって、こどもたちがそれに到達することなく、ただただおしゃべりをつづけていたように、おもわれたのでしょうか。この先生は、こどもたちの声を耳にはしましたが、けっして聴いてはいませんでした。

### 甲冑を身にまとう

宗教哲学者のマルティン・ブーバーは、「われわれはみな、甲冑を身にまとい、われわれに生ずるしるしを近づけぬようにしている」<sup>1</sup>と書いています。さきほどの先生は、教師という甲冑をぬぐことをしませんでした。甲冑のなかでは、なにも要求されず、だれも語りかけず、すべては静かだ、とブーバーはいいます。もし甲冑をぬいで、こどもたちの声にふれたならば、わたしたちのうちで、あるサインが受けとられます。サインとはなにもものかから、わたしたちに送られるものであり、それに応答することが求められます。それが「われわれに生ずるしるし」です。こどもたちから発せられる、おもいもよらないアイデアにであうと、わたしたちが「知っている」と信じていたことが揺るがされ、不安になるでしょう。ところが、わたしたちのおおくは、応答が求められないように、制度や習慣、固定された役割や信念という甲冑を身にまもってしまう。そのようなひとたちのつくる社会こそが、対話を拒む社会なのです。

では、ブーバーのいう対話とはなんでしょうか。それは、「生きていることは、語りかけられていることであり、われわれはただこのしるしに立ち向かい、これに耳を傾けること」<sup>2</sup>、また「人間が出合うところのものに応答すること、すなわち、見たり、聞いたり、感じたりすることができるものにたいし、応答すること」<sup>3</sup>、こうしたことが対話なのです。

### セキュリティとセーフティ

さきほど、こどもたちとの対話の例をあげましたが、わたしの友人に、トーマス・ジャクソンさんという哲学者がいます。彼はハワイの小学校にて30年ちかく、こどもたちとの対話をおこなっていますが、彼の対話の実践において、もっとも重要なキーワードは、「セーフティ」です。セーフティという英語は、日本語にそのまま訳すと、「安全・安心」になってしましますが、彼の意味するところはそれではありません。「安全・安心」というのは、

<sup>1</sup> マルティン・ブーバー『汝と我・対話』（植田重雄訳、岩波文庫）p.188.

<sup>2</sup> ブーバー、同所.

<sup>3</sup> ブーバー、p.199.

むしろ「セキュリティ」のことで、問題がおこらないように、かたくガードをかためること、ブーバーのことばをかりるなら、甲冑で身をかかすことです。ジャクソンさんは、ハワイ大学でこどもたちとの「セーフな探究 safe co-inquiry」について教えていますが、ジャクソンさんの授業を受けたある学生は、レポートのかわりに、ある自作のオブジェを提出しました。それはふたつの人形で、一方は卵の殻で身を守って武装したすがた、もう一方は、その殻を脱ぎ捨ててはだかになっているすがた、です。この、甲冑を脱ぎ捨てて、解放されたすがたこそが、哲学的なセーフティである、というわけです。

近年、看護の分野でも「サイコロジカル・セーフティ (psychological safety)」というかんがえかたが、導入されていますが、これも「安全性」ではなく、組織のなかの信頼関係がつくられること、つまり、率直にものをいいあえる関係のことを指しています。しかし、対話を拒む社会では、このサイコロジカル・セーフティも、「安全・安心」、つまり、防御し、リスクをおかさない、他者にふかく関わらないこと、とまったく逆の意味にとらえられがちです。どちらにしても、セーフティは、文字通りの「安全・安心」ではなく、ガードを解いてある場所や目のまえの相手を信頼して、率直に語りあうことができる関係を指しています。

### 対話と対話ではないもの

もういちどブーバーにもどると、彼は対話に見えるが対話ではないものを二つあげています。そのひとつが、理解や意思疎通のために必要とされる技術です。それを今日の医療や福祉、教育や政治の場面にあてはめてみるならば、たとえば、交渉 (negotiation)、意見調整 (coordination)、合意形成 (consensus building)、共同意思決定 (shared decision making) などがこれにあたるでしょう。これらは、一方的ではなく、双方向 (interactive) でなされる技術、または、なされるための技術であり、もちろん、現代社会においてコミュニケーションを円滑にすすめるために、なくてはならないものです。インタラクティブ、つまり、双方向のやりとりが成立することは、いかにも、対話のようにみえますが、これは、いわばボールが一方から他方へと行き交うことで成立する、きわめて洗練された技術によるゲームにほかなりません。

もうひとつが、「顔をもたない」、「関わるべき人々との真の関係」にははいりこまない、ほとんど独白とかわらない会話です。議論 (discussion)、討論 (debate)、嘲笑、愛のささやき、などが例としてあげられています。ブーバーはこれらを「顔をもたない妖怪」と皮肉をのべていますが、まさしく、この「顔をもたない」というところが、以上の二つの、対話にはみえるが、対話ではないものを要約しているとかんがえられます。ブーバーにとって大切とおもわれる対話とは、まさしく顔のある、「人格＝パーソン」の交わりにはいっていくことにほかならないからです。(この人格＝パーソンの意味については、この講演のさいごで、ふれたいとおもいます。)

### 能力ではなく、状況にはいりこむ

対話において、見ること、聴くこと、話すことは、もちろんある程度まで必要なものですが、それがどれだけできるのかということは重要ではありません。つまり、能力、できることの問題ではない、ということです。むしろそれは、「できる」ということをてばなして、あることをそのままにみる、その修練のさきにあるものです。ブーバーはこう書いています。

[応答するためには] 注意深く見つめることがまずなにより必要である。...なんと  
なれば、注意深く見つめる者にとっては、しるしとの出会いの状況の瞬間を、彼が  
いつも見慣れているものを扱うように、〈適当に済ませてしまう〉ことが、もはや  
できないからである。つまりその状況に関わり、その状況の中へとはいり込むこと  
が求められる。この場合、彼がいつも適用できるものと信じこんでいるような知識、  
技術、体系、計画、一切のものがなんの役にも立たなくなるのである。なぜなら、  
彼は今や、分類しがたいもの、あの具体性そのもので、ことをなさねばならぬから  
である。...それゆえ、注意深く見つめる人とは、生起しつつある創造に直面するこ  
とである。(前掲書 p.199)

「生起しつつある創造」とは、いかにもおおげさに聞こえますが、要するに、「なにかが  
そこで生まれる」ということです。対話が形式や技術ではないとすれば、対話とは、それが  
生まれつつあるその瞬間、つまり、サインを受けとって扉をひらき、わたしたちが「はいり  
こむ」ところなのです。だれかから、あるいは、なにかから、わたしたちが「語りかけられ  
た」というサインを受けとったとき、わたしたちは相手とともに、対話のなかに、関係のな  
かにはいって行くのです。

### エピソードを哲学的に読む

ここで、ひとつの印象深いエピソードを紹介したいとおもいます。これは、がん看護専門  
看護師である田村恵子さんが、がんの末期を経験されている岩田とも子さん(仮名)と話さ  
れたやりとりの一部です。なお、医療の分野では、こうしたやりとりについて、「事例」や  
「ケース」というかたちで導入し、検討することがほとんどだとおもわれます。しかし、こ  
こでは、事例やケースではなく(なので事例の紹介としては不十分かとおもわれますが)、  
おふたりが出会われた唯一無二のエピソードとして引用し、それを哲学のテキストとして  
解釈していきたいとおもいます。

岩田さんは、60代の女性で、がんが再発して、先進医療の検査をうけ、あたらしい治療法がうけられる可能性を知ってとてもよろこんでいました。しかし、その治療がむずかしいことを知らされ、田村さんと話をしたい、と相談センターに連絡されました。

### 「われわれに生ずるしるし」

はじめて岩田さんと会われたときの様子を、田村さんは、つぎのようにふりかえっておられます。

岩田さんは臥床しており、全身の浮腫が強く寝返りが難しい状態であったが、演者〔田村さん〕の顔をみると「待っていました！ありがとうございます」と笑顔を見せた。会話を始めると呼吸は促迫するが、「息苦しさはないから大丈夫。話したかったのうれしい」と答えて、これまでの経過を語った。「ゲノム治療なんて全然期待してなかったのにね、奇跡が起こったの。ありがとうございますって感じ。治療ができるってわかって、何が何でも治療したいって思ってた。」

岩田さんはどうして、「ありがとうございます」と笑顔をみせたのでしょうか。つづく岩田さんのことばのなかで、「ありがとうございます」が、田村さんだけにむけられたわけではなく、「奇跡が起こった」ことに対する感謝であることがわかります。対話を意思疎通の場だととらえてしまうと、岩田さんが「何が何でも治療したい」という希望をもっており、それが伝えられ、受けられることがゴールとなってしまいます。

しかし、ふりかえるなかで、田村さんが岩田さんとの出会いを「ありがとうございます」から記述されていることに注意しましょう。田村さんは、この「ありがとうございます」「奇跡」をあえて解釈せず、サイン、しるしとして受けとめ、対話の扉をひらき、なかにはいっていきます。

### わかっているけど、奇跡を信じたい

つづくやりとりは、こうです。

岩田「いろんな人が心配してくれているのもわかります。でも私は最後まで奇跡を信じたいのよ～。わかってくれる？」

田村「わかります。確かに奇跡は起こるかもしれないですね。」

岩田「そうですね。なのに治療ができないとか、ホスピスがいいとか、そんな話ばかりするのよ。看護師さんとか、ワーカーさん。話をきいている途中で気分が悪くなってきて吐きそうになった。今も思い出すと吐き気がしてくる...」

田村（うなづく）

岩田「皆さんが心配してくれているのはわかるんだけど、私はもっと生きたいのに。わかってはいるけど、奇跡を信じたいの。」

田村「わかりました。どうしても、奇跡を信じたいのですね。」

岩田（大きくうなづいて）「はい、そうです」

対話の背景として、熟練した専門看護師としての田村さんの経験と知識、そして技術がたしかにある、ということは、いまここではわきにおいておきましょう。この場面を熟練した看護師の技術、つまり、相手の言うことに共感し、否定せず、まずは受けとめる、傾聴する、とだけ理解すると、対話の本質はうしなわれてしまうでしょう。

### 確かに奇跡は起こる

「わかります。確かに奇跡は起こるかもしれないですよ。」という田村さんのことばが、もし、その場かぎりの反応であったとすると、それ以上のことは起こりえず、会話はとまってしまったでしょう。けっしてでまかせで、「確かに」ということはできません。ここで、田村さんは、岩田さんの「ありがとう」が向いている先を見ようとしています。ブーバーのことばをおもいだしましょう——「注意深く見つめる者にとっては、しるしとの出会いの状況の瞬間を、彼がいつも見慣れているものを扱うように、〈適当に済ませてしまう〉ことが、もはやできないからである。」

田村さんは、つづく対話をとおして、岩田さんがどうして奇跡を信じたいのか、その理由をきいていきます。ひとりで働きながら生活をし、高齢の母親の介護をしなければならない、退職後、小説家になるための努力をしている、こうした背景についてききながら、田村さんは、状況のただなかにはいっていきます。重要なのは、田村さんが岩田さんのおかれた状況を外からながめるのではなく、田村さん自身が、生まれつつあるこの対話のなかで、〈ともに状況に立つ〉という意志をつらぬかれている点です。それはもはや、共感ではありません。

### 女王様を演じる

このような、〈ともに状況に立つ〉ところから、田村さんはつぎのように提案します。

田村「岩田さん、女王様になってみませんか。女王様って自分の意にそぐわないことであっても、家来が自分のためにしてくれていると思ったらそのまま周りの提案にそってあげていると思うんだけど、岩田さんも明日の医師や看護師のお話を女王様として聞いてみるのはどうかな？」

岩田「えっ、女王様？」

田村「そう明日の説明の時に、女王様になってみるのはどうかなと思って。」

岩田「いやー、おもしろそう。演じてみるってこと？」

田村「そうです。女王様になってよきにはからえというのはどうかなと思って。岩田さんが何度も、皆が私のこと心配してホスピスのこと言ってくれてるって、おっしゃっているでしょう。なら、いっそのこと、その提案に乗ってみるのはどうですか。細かいことは皆に任せるって。」

岩田「わかった演じてみるわ。女王様ね、なんか楽しくなってきたわ。」

田村「そうですか、よかった。」

一見すると、「奇跡を信じたい」という岩田さんのことばに対して、応答する田村さんのことばは、唐突におもわれるかもしれません。しかし、おどろいたことに、「奇跡」という「しるし」をともにみるふたりは、意気投合しはじめます。このやりとりの哲学的な意味についてかんがえてみましょう。

### じぶん自身を統治すること

「女王」とは統治するひとです。「統治」とは、近代社会においては、主権者が国や人々を支配することを意味していますし、現に、日本における民主主義も統治のひとつの形態です。英語の“govern”、フランス語の“gouverner”の語源となるラテン語の“gubernare”は、船の舵取りをする、という意味です。哲学の歴史のなかで、とりわけ古代ギリシア・ローマにおいては、「舵取り」（ギ：kybernan、ラ：gubernare）とは、政治的な文脈では為政者による国の舵取りを、そして、倫理としては、じぶん自身をただしく導く、という二重の意味でメタファーとしてつかわれてきました。つまり、人生を航路にたとえ、世界のなかでじぶん自身をみうしなわず、ただしく舵取りをしていく、ということが、政治家や哲学者たちにとって、必要不可欠な徳であると、古代のギリシア・ローマでは、ひろくかんがえられていたのです。

（ところで、「統治性」（仏：gouvernementalité, 英：governmentality）とはおおげさなことばで、ふだんはまったく見聞きしないことばだとおもいます。この統治性という概念に、現代において光をあてたのは、フランスの哲学者、ミシェル・フーコーでした。フーコーは、1984年にエイズが原因で生涯をおえますが、死を目前にした1981年から1984年にかけて、主体、統治、真実を主題にした講義をコレージュ・ド・フランスにておこないました。彼は、近代的な法、政治、学問による人間にたいする支配・管理のシステムが形成される以前の、ひとがひとにはたらきかけ、ひとを動かし、従わせる生の様式を分析するために、統治性という概念を提案しました。）

## パレーシア：真実を語る

田村さんの「女王様」を演じるという提案は、じぶん自身の人生の舵取りをしたい、舵をこの手からはなしたくない、という岩田さんの意志を尊重したものでした。「舵取り」は「意思決定」ではありません。意思決定の主体は決定の瞬間にもとめられる点のようなものですが、人生の主人とは、いかなる場面においても、舵から手をはなさない、という責務を受けなければなりません。「よきにはからえ」とは、統治する者としての責務をはたしつつ、しかも、その発言の結果を受け入れる覚悟をきめる、ことです。田村さんは、「女王様」に、統治する者としての責務をはたすべきである、と進言したのです。

フーコーによれば、古代の哲学者は、「君主の傍らで発言し、なすべきことを述べるような助言者」<sup>4</sup>の役割をはたしていた、といます。表面的にみれば、奇妙な提案に見えるかもしれませんが、みずからの人生の女王、つまり統治者としての責務をまっとうせよ、という真理について、相手をおそれずに率直に言う、という行いは、フーコーのいう「パレーシア」、つまり、真実を語る行為そのものです。王に対して進言する哲学者の役割は、助言をとおして、じぶんの国を統治（舵取り）するという責務をまっとうさせることです。そして、さらに、哲学者にとっても、じぶん自身を統治することは、みずからのつとめであり、じぶん自身をみうしなわず、みずからを知り、じぶんや他者を配慮、ケアすることができるよう、日々つねに対話的に生きながら、修練をかさねなければなりません。

## 私、弟子にしてください

岩田「でも女王様ってちょっと偉そうじゃない？年も取ってる感じもするでしょう。」

田村「えらいと思いますよ。クイーンですからえらいのは困る？」

岩田「うーん…。年寄りって感じするでしょう？」

田村「じゃ、プリンセスにする？プリンセスとも子はどうですか？」

岩田「それがいいわ。わかった。明日、演じるわ。どうしたらいい？」

（どう演じるかについて2人で話し合う）

岩田「どんどん楽しくなってきたわ。田村さんって、面白いね。すごい不思議ね。」

田村「そうですね。実は私ね、魔法使いなのですよ。ご存じなかったですか？」

岩田「えーそうだったの。じゃ、私、弟子にしてください。」

田村「もちろん、一番弟子にしますね。じゃこれからは、ほうきに乗っていきましょう。」

空を飛ぶとずっと先まで見えて安心ですよ。」

<sup>4</sup> フーコー『自己と他者の統治』（コレージュ・ド・フランス講義 1982-1983年度、阿部崇訳、筑摩書房）p.85.

ここでいわれる「魔法使い」とは、哲学者のことだ、とわたしは理解します。では「魔法」とはなんでしょうか。それは、すぐあとに話されるように、「ずっと先まで見えて安心」になれること、すなわち、ひとや、すべての生き物にとっては、病や死はさけることができないことであり、そのおとずれを平安に見通せるように、そのような修練をかさねることで、ローマの哲学者、セネカも、人生を風景にたとえ、高みからその細部を見る、という助言を友人マルキアにたいしておくっています。（「マルキアに寄せる慰めの書」）<sup>5</sup>

「演じる」とは、うそを装うことではありません。演じるとは、実行、遂行することであり、むしろ、それは、修練（ギリシア語のアスケーシス）を意味するエクササイズ、より正確には、「スピリチュアル・エクササイズ」だと解釈できます。古代ギリシア・ローマにおいて、スピリチュアル・エクササイズとは、どのような状況においても、じぶん自身に向き直り、つまり、状況にながされて自己をみうしなわず、じぶん自身や他者と関わる哲学者の修練であり、その修練の場が、まさしく対話することでした。岩田さんは、田村さんとともに、女王を演じる、つまり、じぶんの人生の主人となるエクササイズをおこない、さらに、その修練をつづけるために弟子になる、という約束をしたのです。

### 哲学としてのスピリチュアリティ

哲学としてのスピリチュアリティは、じぶん自身の主人であろうとする、という生涯にわたってつづけらる修練であり、今日の宗教的な意味あいでの「精神世界」や「死生観」とはべつのものです。ギリシアの哲学者、ディオゲネスは、樽のなかで生活していた、と言い伝えられていますが、彼はアレクサンダー大王と対面したおりに、あなたの征服した国土はいずれ失われるだろうが、わたしはわたし自身の国王であるから、なんびともわたしから国土をうばうことはできない、と権力や権威をおそれないパレーシアを実行しました。スピリチュアリティとは、ことばを現実に生きることであり、実行がともなわなければいけません。

岩田さんは、田村さんと女王様を演じきると約束します。これこそパレーシアです。パレーシアとは、告白や内心の吐露ではなく、じぶんがこれから語ることを実行するという、語ることをとおして行為する、ことばと行為の一致、「語る主体が自分自身と取り交わす契約を明るみに出すような、本当の言説」<sup>6</sup>を意味します。ソクラテスのパレーシアは、当時の

<sup>5</sup> セネカは、息子を若くしてなくしたマルキアに寄せて、人生を天空と海にかこまれた都にたとえ、その都の入り口煮立って、その光景を描きます。「[大洋では] 見知らぬ大地を目指して海に乗り出した船々も見るができるでしょう。人間の果敢さが試みぬものは何一つないことをあなたは知るはずです。あなたはそれを眺める人ともなり、ご自身が壮図を企てるその人間の一人ともなるのです。」（『セネカ哲学全集』第5巻、大西英文訳、p.278）

<sup>6</sup> フーコー『真理への勇気』（コレージュ・ド・フランス講義 1983-1984 年度、慎改康之訳、筑摩書房）p.84.

ひとびとに衝撃をあたえました。なぜなら、ソクラテスはアテナイにて死刑を宣告されたのち、弟子たちのまえで、死はおそれるべきものではない、と語り、死について対話したあとで、みずから毒杯をあおいだからです。<sup>7</sup>

### ここに帰ってくる

岩田さんは、田村さんとの対話の翌日、家族とともに医師からの説明をうけ、緩和ケア病棟への転院を決めました。病状がさらに悪化するなか、その3日後に田村さんにふたたび面会を申し込まれました。

岩田「本当に楽しかったわ。先生も、師長さんも、弟も、皆がとっても驚いていた。私が嫌だと言いつ張ると思っていたから、何が起こったのって感じで。本当の気持ちを隠してね、演じた。早速、ホスピスを探すことになったみたい。ワーカーさんに「どのホスピスがいいですか」って聞かれたけど、「どこでもいいので、弟に任せます」って答えた。弟が行ってくれるみたい。私は「奇跡」を起こして必ずここに帰ってくるので、どこでもいいの。母にも電話で伝えたら「よかった」って、安心したみたい。

岩田さんは、女王として、医療者にも、弟にも、母親にも気遣いをみせた、と師匠である田村さんに報告します。そして、「あとは「奇跡」を起こすことだけ。必ず戻ってくるから絶対にここで待っててね。」と約束します。専門家である医療者は、症状の理解にもとづいて患者の経過を予測し、可能な手立てを講じます。「説明」と「意思確認」も専門家のはたすべき義務であり、個々のおこなれたことは、数多くのひとつの事例として検証されます。しかし、岩田さんにとってはそうではありません。彼女が直面しているのは、ブーバーのいうように、彼女の「知識、技術、体系、計画、一切のものがなんの役にも立たなくなる」状況です。「奇跡を起こしてここに帰ってくる」は、希望でもなく、現実逃避でもなく、また、意思ないし意志でもありません。岩田さんは、田村さんとともに、注意深く見つめ、「創造」を試みるのです。「ここ」とは、面会のおこなわれている一室のことではなく、まさしくいま、岩田さんと田村さんが対面し、対話しているその場所、対話がつくられていく場所を指しています。事実、岩田さんは意思決定の場面で「魔法使いの弟子」として「奇跡」を起こし、みなをおどろかせて、田村さんとの対話のもとへ帰ってきたのです。

しばしば、医療者・支援者は鳥の目、患者・当事者はアリの目、といわれますが、対話のなかではそのどちらでもなく、魔法使いの目とでもいいでしょうか、あるときはほうきにの

---

<sup>7</sup> プラトン『パイドン』（岩田靖夫訳、岩波書店、1998年）

って、高みから人生をみわたしつつ、しかし、ここぞ、というたいせつなときには、地上にてじぶんの足、じぶんのことばで、そのひとだけがあゆむ道をきりひらき、創造するのです。

### これからが本番です

さらに、岩田さんはこういいます。

「とてもショックなお話でした。奇跡が起こりそうだったのにその薬はできない。主治医は頑張ってくれたけど診療科の方針として体力的にリスクが大きいということでした。昨日、田村さんとお話しできていなかったら頭が混乱して立ち直れなかったと思います。昨日の話で自分にぴったりの世界（女王様や魔法使い）で表現してもらって、今日は魔法使いの子分として、今までとは違う自分を演じてみました。みんながとても驚いたけど、本当の気持ちは隠して素直に従いました。看護師さんがあとで田村さんとの話の内容を聞いたがったけど、教えなかった。」

「今までとは違う自分を演じる」とは、どういうことでしょうか。それは、「頭が混乱して立ち直れ」ないであろう「自分」と決別し、じぶんを変える勇気をもつ、ということです。まさしく、哲学的スピリチュアリティとは、じぶんを、自己自身をつくりなおすこと、「自己の世話〔ケア〕をし、自己を変え、自己を浄化し、変形し、変容させる行動」<sup>8</sup>、修練であり、岩田さんは、「魔法使い」（哲学者）の弟子として、それを実行するのです。彼女の隠された「本当の気持ち」とはなんでしょうか。岩田さんはつづけます。

「演じた感想はとても気分がよかった。本当の気持ちはというと、奇跡を起こした田村さんの一番弟子になることです。そのためにこれからが本番です。」

田村さんとのさいごの対話をおえられたあと、岩田さんは緩和ケア病棟にうつられ、そのひと月後に亡くなれました。「奇跡」とはなんでしょうか。それは対話のなかでくとも状況に立つ）ことでおふたりが確かめられたものであり、わたしは、あえてそれにことばをあてないでおこうとおもいます。さいごのことば、「これからが本番です」もまた、人生の主人公たろうとする岩田さんの一世一代のパレーシア、真実の語りであり、それは岩田さんだけがあゆむ道をきりひらくことばだったのです。

---

<sup>8</sup> ミシェル・フーコー『主体の解釈学』（コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982年度、廣瀬浩司・原和之訳、筑摩書房）p.15.

## ペルソナ

このエピソードは、もうひとつ、みのがすことのできない、たいせつなことをおしえてくれます。

女王を演じるということは、じぶん自身を統治するという哲学のスピリチュアリティの実践であるだけではありません。岩田さんは、「女王様」「魔法使い」という役割を演じました。それはいうまでもなく、演劇的な役割であって、古代ギリシア・ローマの時代における、「王」や「哲学者」そのものであったわけではありません。岩田さんは、いわば、人生という舞台のうえで「女王」「魔法使い」という仮面をつけて演じたわけです。ここに、古代ギリシア・ローマの社会において、貴族や奴隷といった身分制のうえに成立していた哲学者の実践と、現代における対話の実践とのちがひがあります。

パーソン (person) の語源となるラテン語の「ペルソナ」 (persona) は、古代ギリシア語で「顔」を意味する「プロソポン」に由来し、ラテン語として、はじめは劇場の仮面、役割、人稱を意味していました。そして、紀元後のヨーロッパ世界において、役割、人に与える影響、印象、尊厳、さらに、劇場という演劇における仮面、そして法体系のうちでの格、社会的関係のうちで役割をもつ人格、近代社会における「人」という意味へと発展していきます。

## パーソン、純粹な〈個〉と交わり

はじめにお話したように、ブーバーは、対話を「人格の関係」とよんでいました。人格＝パーソンとはなんでしょうか。

奴隷制や身分制をもとづくギリシア・ローマの「自由人」とはちがひ、近代の社会ににおいて、わたしたちは、生活のなかでさまざまな役割を演じながら交流し、同時に、ひとりひとり、かけがえのない〈ひと〉として生きています。交流のためにさまざまな演じられる〈役割〉と、おきかえることのできない唯一無二の〈ひとそのもの〉とが、おなじ「ペルソナ」という概念によってあらわされ、さらにそれがキリスト教神学のなかでは、創造主たる「全き神」としてのペルソナと、人間としてかけがえのない「全き人」としてのペルソナ (位格) として位置づけられてきたことは、今日、わたしたちが人格＝パーソンを理解するうえでも、けっして無視できない事実です。<sup>9</sup> つまり、ペルソナが、純粹の〈個〉であるとともに、他者と交わり、交流をうみだす関係性と流動性を意味するのです。ブーバーのいうように、人格＝パーソンは、近代的な個人 (Individuum) とはことなり、それそのものとして対話的存在である、と理解されるのです。(したがって、全人 (whole person) は、孤独的存在ではなく、交わり、関係性のなかでしか全人たりえないこととなります。)

<sup>9</sup> 坂口ふみ『〈個〉の誕生：キリスト教教理をつくった人びと』（岩波現代文庫、2023年）

## 表現としてのスピリチュアル・エクササイズ

「いやー、おもしろそう。」  
 「どんどん楽しくなってきたわ。」  
 「本当に楽しかったわ。」

このエピソードのなかで、岩田さんは女王様を演じることを、終始、こどものようにたのしんでいました。古代ギリシア・ローマの哲学者による単独者の英雄的なふるまいとは、ずいぶん異なります。むしろ、岩田さんは演じる「あそび」としてのエクササイズをたのしんでいたのだ、とわたしはかんがえます。

純粋な〈個〉としての岩田さんにとって、「本当の気持ち」とは、いわくいいがたいもの、ことばになりえないものであったはずですが。しかし、人生においてある困難に直面したとき、劇場の舞台上の役（割）が、それを演じるひとに、〈個〉をこえた表現するちからをあたえるように、役（割）としてのペルソナが、人生のある舞台において、ちからをあたえてくれるのです。人生の苦難はわたしたちを孤絶した状態におちいらせます。そのようなとき、女王様や魔法使いといった表現行為による、ささやかな創造がわたしたちを対話的關係へとひきとめ、そこでのパレーシア、つまり、ことばを真に生きることが、全人としての真の関わりを生じさせるのです。

## 日々のいとなみのなかにある対話

苦悩とは、目の前の痛みや困難ではなく、その向こうにある、わたしたち人間のちからのおよばないなにか、いわくいいがたいもの、にかかわっています。わたしたちにとって、苦悩はにげることも、とりさることも、ことばをあてがうことすらも、かなわないないものです。病や死そのものが苦悩なのではなく、それらがわたしたちにつきつける、ままならなさこそが、苦悩の種といえるでしょう。

現代における哲学のスピリチュアリティとは、なにか特別な場面でもとめられ、発揮されるものではありません。むしろ、日々のちいさないとなみのなかで、実践、実行されるものです。とりわけ、演じる、うたう、おどる、詩をかく、表現するという営みは、わたしたちの日々のくらしのなかで経験する喜怒哀楽をうつしだし、表現する主体として、ままならないわたしたち自身の生存に、一定のへだたりをおいて、かかわることを可能にします。岩田さんにとって、「女王様」や「魔法使い」になることは、一生をかけたごっこあそびとして、そうした表現する主体としてのちからをあたえてくれる、文字通りの奇跡だったのではないのでしょうか。苦悩にかかわる対話とは、苦悩について直に語りあうのではなく、逆説的に

も、わたしたちの日々のいとなみのなかにあられでる、ちいさなものと、その「しるし」をみつめなおし、応答する表現の知恵のなかで実行されるのです。さいごにもういちど、岩田さんのことばをおもいしましょう。

「これからが本番です」

#### **注記**

本稿は、2023年7月1日、神戸国際展示場・会議場で開催された日本緩和医療学会学術大会、招待講演「苦や死に向き合う患者・家族との対話とケア」でなされた講演のよみあげ原稿です。

(ほんま・なほ)